

茅 風

— Breeze from the field of thatch-grass —

2013年6月3日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 39号

上ノ原にも春が来ました。5月11日「山の口開け」

- ◆1月～5月の活動報告(事務局).....1
- ◇第12回「総会」報告(事務局).....2
 - ・2013年度の主な活動計画・日程について
 - ・執行態勢～新任幹事・オブザーバーの紹介
- ◇退任ご挨拶(海老沢秀夫).....2
- 雪の藤原:のらえもん「自然塾」コラボ合宿(事務局)・3
- 特集「一般参加歓迎プログラム」2013①.....4
 - ・不発の茅場野焼き顛末記(草野洋)
 - ・一般参加者へのお心くばりに感謝(小川知加子)
 - ・滝とカモシカ(芦崎天音)
 - ・茅と養蚕(米山正寛)
 - ・アルバム「5月:上ノ原の思い出」(増井太樹)
- 麗澤中「樹木観察会」開催報告(事務局).....8
- 上ノ原の植物・昆虫と芦ノ田湿地の調査(西村大志)・9
- ◆藤原の“ほっと”ショット・コーナー⑤(中村智子).....10
- ◇編集後記～塾長のつぶやき～.....11

■ 1月～5月の活動報告

事務局

- 1月18日:立教大学経済学部・吉川ゼミ(環境と持続可能な社会)にて、「森林塾青水が目指す新しいコモンズ」と題して当塾の活動報告と情報提供(清水)。
- 1月21日:森林文化協会を訪問。須藤常務、岡本事務局長、米山・海老沢の新旧グリーンパワー編集長に新年度活動計画を説明、今後ともコラボレーターとして相互に連携強化していくことを確認。(浅川、清水)
- 1月22日:みなかみ町役場を訪問。岸町長以下関係各課長・スタッフ方に過年度の活動報告と今年度事業計画につき説明、協力方お願い。(清水)
- 1月30日:「日本環境ジャーナリストの会」主催シンポジウム「ジャーナリズムは自然の恵みをどう伝えるのか?—利根川流域の生態系サービス」にパネラーとして参加。水源地域における当塾の活動を紹介しつつ、利根川流域の生物多様性ホットスポット保全の重要性・意義につき課題提起(清水)。
- 2月9日～10日:自然観察会「のらえもん」の親子連れほか21名でコラボレート合宿。雪そり遊び、雨呼山かんじきトレッキング、郷土食ボタづくり、など厳冬の藤原の大自然を満喫。惣一郎さんはじめ民宿「樹林」の皆さま、大変お世話さまでした。(報告→3頁ご参照)
- 2月27日:麗澤中「樹木観察」の新しい運営のあり方につき、森川教頭先生たちとの打合せ検討会。
- 3月9日～10日:「講座コモンズ村ふじわら」2012⑧開催。参加12名にて、地元主催「かまくら祭り&キャンドルナイト」に協働して準備作業のお手伝い。キャンドル1500本は廃油を利用して作られました。
- 3月15日:当塾の今日あるに永らくかつ大いなるご貢献をいただいた海老沢幹事の送別会。総勢18名が参加、盛大な感謝と送別の宴となりました。(退任ご挨拶→2頁です。お心のこもった珠玉の名文、必読です!)

- 4月20日:第12回「総会」。正会員21名(委任状20名)に加え、町役場環境課から高橋 GL、山口主査のご臨席と一般会員・会友9名、計32人名の参加をいただき開催。於いて、原宿・環境パートナーシップ・セミナースペース。特別セミナー「利根川水系の絶滅危惧種」(講師:小幡和男先生)を併催。
- 5月11日～12日:今年度より新たに開幕の「一般参加歓迎プログラム」の初回。野焼きは町役場当局の意向を



- 勘案し中止したもの、来年に備えての防火帯づくり(写真上)が大幅に進捗。くわえて、これまで機会がなかった冬鳥・春鳥や春植物の観察を満喫。参加39名の皆さん大喜び、夜の交流会も盛り上がり来年の再会・リベンジを誓いあいました。(特集→4頁ご参照)
- 5月18日:麗澤中「樹木観察会」。高野学監以下スタッフ11名にて、中学1年生160余名を対象に実施。今年度より当塾の単独受託事業に。(開催報告→8頁ご参照)
 - 5月25日:山崎裕志先生(プレック研究所)以下、増井、西村、清水にて上ノ原と芦ノ田湿地の昆虫・植物調べを行ないました。(→9頁報告ご参照)

■第12回「総会」開催報告

－新年度活動計画・日程と特別セミナー 事務局

4月20日、清水塾長の議事進行のもと草野塾頭および浅川幹事より、過年度活動の実績・決算ならびに新年度の活動計画・予算の報告があり、いずれも満場一致で承認されました。以下、新年度の主な活動計画・日程と執行部の顔ぶれを報告します。



◆2013年度の主な活動計画・日程

水源地域の環境資源を持続的に利用する「流域コモンズ」形成を目指す「新しい10年」の3年目。 **今年度の主な活動計画・日程は最終頁に記載**の通りです。

それぞれの活動の参加者募集案内は、開催予定日の1カ月前を目途にお届けします。興味のあるプログラムは、予めチェックして予定に入れておいて下さい。

◆新年度の執行態勢～新任幹事・オブザーバーの紹介

活動推進の裏方を務める幹事・オブザーバーを紹介します。さらなる若返りと地元シフトを計りつつ、役割分担を明確にしました。ご志援ご指導の程お願いいたします。

- ・浅川 潔 (幹事～事務局長)
 - ・稲 貴夫 (幹事～東京学習会、「茅風」通信)
 - ・岡田伊沙子 (幹事～自然ふれあい環境学習)
 - ・川端 英雄 (オブザーバー～大目付、助言・指導)
 - ・北山 郁人* (幹事～みなかみ事務所長、古民家再生)
 - ・草野 洋 (塾頭～事業統括、流域コモンズ)
 - ・清水 英毅 (塾長～全般統轄、外部連携グリップ拡充)
 - ・高野 史郎 (学監～自然ふれあい環境学習)
 - ・林部 良治 (監事～会計)
 - ・増井 太樹 (幹事～一般参加歓迎プログラム)
 - ・松澤 英喜 (幹事～事務局長補佐、総務全般)
 - ・山口 裕昭* (オブザーバー～みなかみ町役場窓口)
 - ・吉野 一幸* (幹事～地元代表、古民家再生、交流促進)
 - ・米山 正寛 (オブザーバー～森林文化協会窓口)
- (青字は新任、*記はみなかみ町在住です。よろしく!)

◇退任ご挨拶

10年間ありがとうございました 海老沢 秀

早いもんです。もしかしたら地球の回転が速くなったんじゃないかと思うくらいです。東京をあとにしてふた月が経ってしまいました。そのうちのひと月は旧中山道を歩き、もうひと月は滋賀県高島市朽木(くつき)の自宅で過ごした時間です。

森林塾青水のメンバーとして過ごした10年間、ある意味ではあつという間の時間でした。でも、1年1年のそのときどきのことを思い返してみると、実にたくさんの出来事がありました。たくさんの人との出会いがありました。青水の仲間だけでなく、藤原の人たちがいて、実際にみんなで身体を動かし、話を聞いて見て、みんなで食べて飲んで、茅場の再出発に最初の段階からかかわれたこと、中身いっぱいの10年間でした。

10年というのは人の人生にとって決して短くない時間です。3月15日に開いていただいた送別会で何人ものの方の話を聞きながら、あらためて藤原、上ノ原にかかわった月日の重大さを思いました。草原再生のために藤原へ通ったというより、自分自身の何かのために通い続けたという感じがしています。上ノ原に行く満たされるものがあつたんですね。私にとってそれは、自然とつながることのこちよさでした。



生き物調べ 2009年9月

人はいつも不満足をかかえて生きています。いつも心のどこかにぽかっと穴があいている。東京に来て私にあいた穴。それは、それまで身につけてきた季節感の喪失、自然とのつながりの喪失感でした。春なのに鳥の声がしない、ハエさえないと落ち込んだものです。東京以前は草深い田舎で山の管理人をやっていたので、特にそんなふうを感じたんでしょう。草や花や虫や、生きものの命がいっぱいで、春夏秋冬、季節の変化をしっかりと見せてくれる上ノ原は、その喪失感を埋めてくれました。そんな上ノ原に、みなさんと10年間もかかわることができたこと、本当に感謝しています。

みなさんから贈られたデジカメは、川端さんからいただいた「中山道極秘メモ」とともに、東京から朽木へ帰る長いフットパスの道中、いつときも離せない大切な道具でした。道の曲がり角で出逢う地藏さんや石仏の顔のアップ、これまで出逢ったいろんな人の顔を思いながらいっぱい撮りましたよ。4月28日の昼前に京都・三条へ到着し、そのあとさらに「鯖の道」を北上、京都・大原を過ぎて県境の峠ちかく

まで歩き、迎えの車がやっと来てくれてその日の夕刻、朽木の自宅へ帰りました。



謝恩歓送会 2013 年 3 月

朽木へ戻ってからは、一生懸命身体を動かしています。持ち主が町に出てしまっって 30 年ほどほったらかしの、半反ほどの田んぼ跡地を借り受け、畑にすべく開墾中です。ここでは何と、上ノ原で指導を受けた火入れ経験が役立ちました。5 月中旬、藪を全面刈り払い、野火をつけて焼きました。私の師匠、となりのシローじい、「うまく燃えたな。ようやくやった」とほめてくれましたよ。「野火つけて朽木のひととなりにけり」。私の朽木住民、再デビューの日でした。

お世話になった藤原のみなさんや、青水のみなさんに、きちんとお礼ができないまま別れてしまいました。中山道の写真やメモも未整理です。梅雨に入ったようなので、その間に室内の作業も進め、みなさんにあらためてご挨拶できるように、がんばりたいと思ってます。遠い場所ですが、機会がありましたら、朽木方面へもお越し下さい。待ってます。

■雪の藤原:のらえもん「自然塾」コラボ合宿 -カンジキ、ソリ、カマクラ、郷土食ボタを満喫-

●2 月 9 日～10 日、参加 21 人中 11 人が児童という賑やかな合宿。お宿はロッジ「樹林」。初日午後は早速、上ノ原にむかい、大人はカンジキ雪原トレッキングを楽しみ、子どもたちはソリ遊びに歓声をあげました。



●夕刻から、「樹林」前庭の雪山を掘ってカマクラ造営。あっという間に、4 基連結型完成。夜はローソク灯して幻想的な酒盛りと、古高先生の解説付き星空観察会。

●夕食後、惣一郎さんと北山所長の参加を得て、古民家整備事業と紫蘇ジュース作りの検討会。どちらも、「のらえもん」の協力をえて、出来ることから前向きに取り組むことで意見一致。『現実を重視するも、理想を夢見て現実に先んずること只一步たれ』の訓え通りにやってみましょう！

●2 日目は「ぼた」作り組と雨呼山カンジキ登山組に分かれて行動。子供やママさん達は全員「ぼた」組で、惣一郎師範のご指導のもと「クルミ割り→実のほじくり出し→味噌づくり→小判型オニギリ作り→味噌塗り→炭火焼き」の一連の工程に夢中になって取り組み。香ばしくほのぼのした甘みの出来上がり。みんな大喜びでパクパク。一人で3つも食べてる子がいました！



●雨呼山登山組も好天に恵まれ、山頂から、一面雪に覆われた藤原集落の美しさに眼を見張り歓声があがりました。



上:頂上での記念撮影

下:集落の俯瞰写真



■特集「一般参加歓迎プログラム」2013① —スタッフ＆参加者レポート—

お目当ての野焼きは中止となりましたが、そのお陰で、新たな気付きや発見、嬉しいこと楽しいことなどが沢山ありました。以下、スタッフの苦労談や参加された皆さまのご感想、塾へのアドバイスなどご紹介します。(編集子)

◆不発の茅場野焼き顛末記

草野 洋

—「燃やしていない」のに「燃え尽き症候群」—

1. 不発の経緯

昨年の茅場野焼きは福島原発の放射能の影響もあって中止を余儀なくされました。

今年の茅場野焼きは雪の壁を防火帯として除雪により消雪した部分を焼く従来の「雪間を焼く方式」でなく、昨年から整備を進めてきた「防火帯方式」で実施することにしていました。

このこともあって、今年はリベンジとして、例年より3週間ほど遅らした5月11、12日のいずれかの日を実施日として一般参加者の募集をはじめ、様々な準備を進めてきました。

5月6日、連休の最終日、現地を下見しました。ススキの乾燥具合は良好で、燃えすぎるほどの状態でしたが、夏と秋に刈り払った東側の共有林との防火帯は、茅場との境界が明瞭で可燃物も少なくなっている状態でした。また、今年、茅場野焼きするブロックCは、北側を作業道で隔離され、西側は十郎太沢となっています。加えて、このブロックは昨年、重点的に茅刈りが行われており全体的に可燃物は少ないところです。このことから、防火帯の手直しと、参加者で可燃物の除去作業を行うことで、延焼の危険性は低く、実施可能と判断しました。ただし、その日の乾燥、風などの気象条件によっては勇気ある撤退も視野に入れていました。

実施日前日、5月10日、防火帯の手直しや道具類準備、現地最終確認等のため、塾長はじめ6人と津田、小幡両先生が現地入りしました。

上毛高原に着いた頃、役場の担当者から着信があり、「相談があるので上ノ原で会いたい」とのことでしたが、明日の打ち合わせだろうとあまり深く考えませんでした。

藤原集落に着き買い物をしていると、「今、上ノ原付近で山火事が起きているらしいが消防車は未だ来ていない」との情報、正直言って「タイミング悪いな」と感じました。

上ノ原に向かい、その直下に着くと消防車が何台もあり、消防団があわただしく動いています。幸いにも火は消し止められていましたが、山火事の直後に遭遇したわけです。手元の温湿度計で気温は30度前後、湿度は25%、なんとなく、プレッシャを感じながら準備を進めているうち、役場の担当者が訪れて、「町内では、ここ1週間ほどで2、3件の山火事が起きており、今もこの直下で出火した状況下で住民の方の心配も増幅されている。については、あくまでも相談ベースだが、野焼きの実施を再考いただけないか」とのこと。相談とのことであるが実質的な中止要請である。

現在の気象条件では危険性は高いが明日の天気予報では曇りのち夜は雨とのことであり、危険性は低くなること、明日がダメなら、日曜日には降雨後の湿った状態での実施が可能であることを主張するも茅場野焼きの許可者である行政から暗に中止を要請されて強行するほどの絶対安全という自信と度胸はありません。結局、中止という苦渋の決断を全員で確認しました。



前日・10日の上ノ原



防火帯の手直し

2. 中止の影響

中止を決定してからが大変でした。

参加者へ「茅場野焼きの中止でも参加するかどうかの確認」「宿のキャンセル」「代替プログラム」などの問題をクリアしなければなりません。日帰り参加者には参加見合わせをお願いし、幸いに、宿泊参加者のうちキャンセルは4名のみ、39名が参加してくれることになりました。

問題は、代替プログラムです。大まかには、初日は春の上ノ原の散策、2日目は、防火帯整備や除伐などの茅場の整備とすることにしましたが詳細な内容までは詰められません。

そうこうするうち、それまでに上ノ原周辺を散策していた、津田、小幡両先生が、散策の案内役と野焼きの効用などのパワーポイントによる解説を申し出いただき一安心となりました。

3. 茅場野焼きをやらないイベントの顛末

5月11日、午前10時20分、参加者が上毛高原に集合し、上ノ原に向かう中で、野焼きの中止の経緯をかいつまんで

説明はしましたがこの2日間をどのように過ごすのかみなさん一抹の不安があったでしょう。上ノ原に着いて、受付後、始まりの会のセレモニーと恒例の山ノ口開き神事を行った後、小雨の降る中を、小幡先生の解説で木馬道、十郎太沢の散策を行いました。

季節は春、キクザキイチゲ、ヤマエンゴサク、ニリンソウが咲き、樹木もオオヤマザクラが咲き、カエデの芽吹きが美しい中を約1時間半の山歩きを楽しんでもらいました。

その後は内野さん達が拵えた心づくしの味噌汁で、冷えた身体を温め、雨も強くなったことから宿で昼食ということにして本家に移動しました。

昼食後、パワーポイントを使った津田先生の野焼きの科学と小幡先生の上ノ原の春の植物講座には参加者も満足していただいたようでおかげ様で充実したプログラムとなりました。その後は温泉へのお誘いなどで過ごし、夕食そして交流会です。



小雨の中、春の上ノ原散策プログラム



「本家」で野焼きの科学と春の草花パワーポイント上映

交流会を行うころ、外はかなり強い雨で、参加者の皆さんは蛙の大合唱のゲコゲコに負けない上戸ぶりを発揮し午前様となるのはやぎ過ぎの方もいたようです。近所の吉野屋さんの裏山の春の草花が見ごろでしたので希望者は散策することにしていましたことから、明朝は大丈夫かなーと本気で心配しました。

私は夜中の3時頃目が覚めたので外を見ると満天の星空、絶好の野焼き日和になること間違いなしです。でもやりません。

最終日は、茅場野焼きはやらないが来年度のリハーサルを兼ねた防火帯内の可燃物の除去をするグループ、防火帯を刈り払う刈り払い機使用グループ、侵入木の除伐のグループ、十郎太沢の源流遡行のグループに分けて行動してもらいました。ちなみに前夜の雨の後もあって野焼きには絶好の条件でした。



「吉野屋」さんの裏山のカタクリ群落



防火帯の可燃物を除去

それぞれ汗を流した作業も終わり、上毛高原への送迎が2往復する必要があることから早めの昼食を済ませて解散としました。

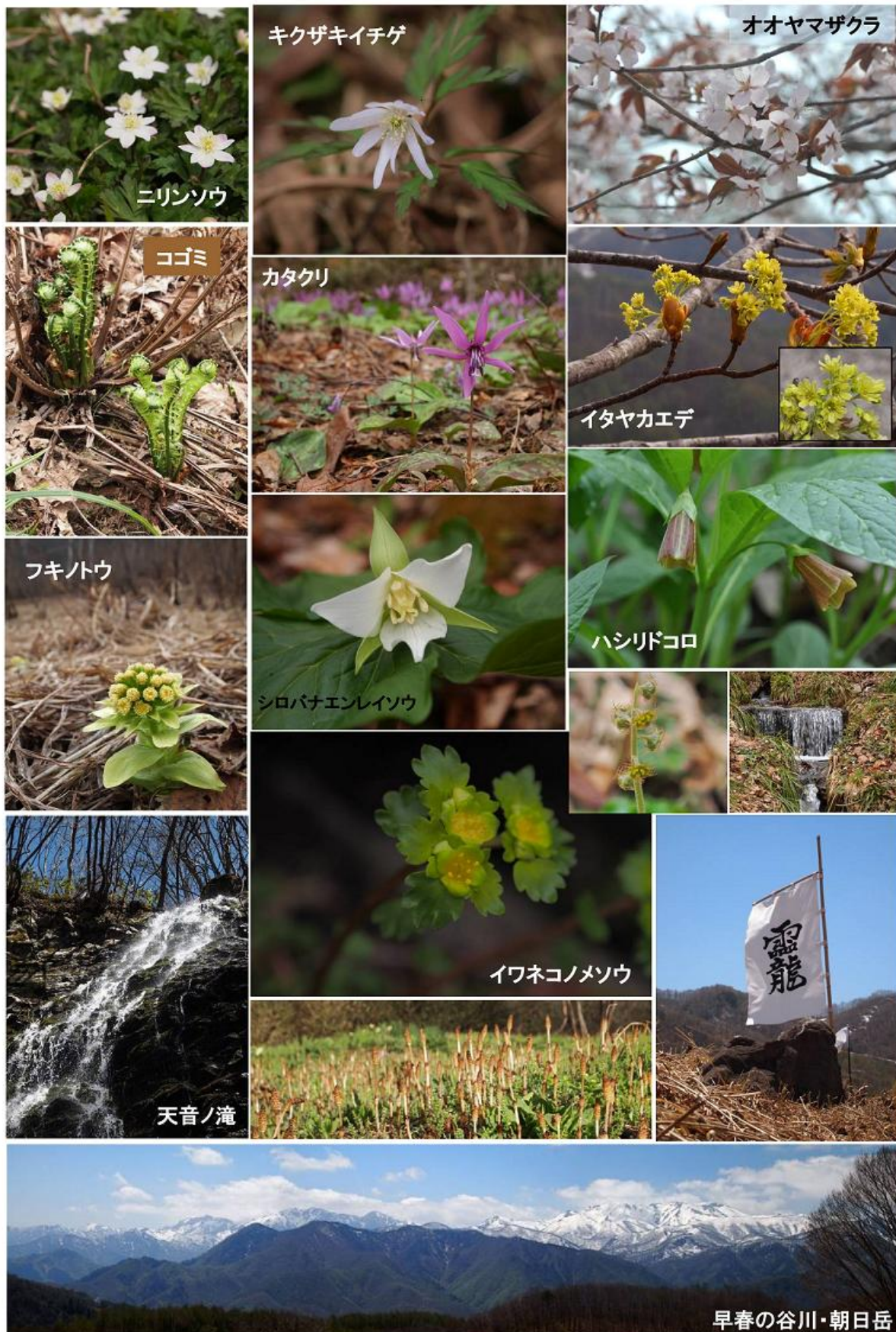
4. 来年の茅場野焼き

茅場野焼きの中止のお詫びも含めて参加者の皆さんに少しでも楽しんでいただくためにスタッフ一同精いっぱいのおもてなしをしたつもりですが不行き届きの面が多数あったことと思います。みなさん懲りずに来年の茅場野焼きへの参加をお待ちしております。

来年の茅場野焼きは、一部に従来の「雪間を焼く方式」に戻すような声もありますが

私としては、今回、試行した防火帯整備を徹底し、実施日をもう1、2週間早くし、縞焼きを採用することで実施可能と考えています。それにしても焼かないのに燃え尽きた感じのする3日間でした。

(了)



アルバム 五月：上ノ原の思い出

増井太樹

◆一般参加者へのお心配りに感謝

小川知加子(NPO 那須高原自然学校)

5月の抜けるような青空のもと火入れ作業の下準備として雑草木の除伐作業に汗を流しました。私が担当した作業は雪で倒伏した萱原の中に立っているヤブウツギを折り畳み式の小さな鋸で伐るという作業でした。ヤブウツギの他にはクマイチゴや萌芽したミズナラ、シラカンバ、ヤマブドウなどもありました。4～5年は火入れしていないとのことで夏にはびょうびょうとした草いきれの強いカヤトの原になるのだろうことが想像されました。

今回「森林塾青水」の活動に参加させて頂いた理由は私がフィールドとしている那須で火入れを復活させたいと考えているからです。

栃木では渡良瀬遊水地のヨシ焼きが有名ですが那須とは環境が異なります。那須を中心として火山の裾野に展開する斜面に、かつては広大な「牧」が存在していたことが知られています。現在は牧場や採草地、飼料生産地として草地としての利用が行われているところも多いですが、森林化しているところも少なくありません。大正時代に植林されたカラマツの不成績造林地や二次林がほとんどで、その一部を草地化して生物多様性に富む半自然草地に改編していくことはその利用履歴的にみても有意義なことと考えています。

今回実際に火入れを体験することはできませんでしたが、いろいろ貴重な体験や情報収集をすることができました。塾長をはじめ塾生の皆様のお人柄や人脈、経験の深さ、多様性にも感銘を受けました。特に、地域とともに新たなコモンズを形成していこうとしていらっしゃる立ち位置に非常に感動しました。2年ぶりの火入れができなくて一番残念に思っているのはスタッフの皆さんが一般参加者を慮っていろいろご配慮くださった姿勢にとっても暖かいものを感じました。このような貴重な機会を企画してくださいました「森林塾青水」の皆さんに深い感謝を申し上げます。

来年は是非リベンジしたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



◆滝とカモシカ

芦崎天音(てのん) (和光鶴川小学校 6年)

小学校4年の夏に横浜市を流れている鶴見川の水源地をめざして歩きました。その時に、カワセミや小さな魚と出会いました。カワセミは、くちばしが大きくて体が青くおなかが赤くて、とてもきれいでした。水源は、町田市と八王子市の境にありました。それが初めての「飲水思源」の旅でした。

その年、国語の時間に富山和子さんの『川は生きている』を読みました。昔の川のはんらんの歴史や、コンクリートで川をかためた悲しみを知りました。川は昔から変わらない自然の川がいいと思いました。

今回、森林塾青水の上ノ原に行きました。空気がきれいで草原に小さな川が流れていました不思議でした。ここが利根川の上流だとは思えませんでした。

二日目の午前中に、上ノ原の山を歩きました。コゴミは、太陽がさして栄養のありそうな土の上に立っていました。コゴミのある場所は急な斜面にはありませんでした。

そのあと少し登ると左に道が見えてきました。斜面を木の枝をつかみながら岩場を登りました。さらにすべりやすい



斜面を登ると、滝が見えてきました。太陽の光があたり、水滴がきれいでした。ふつうの滝は、たてに長いのにこの滝は一つにまとまって横に長い滝でした。(写真左。6頁にもあります。編集子注)

滝からすべりながら急な斜面を下っていききました。岩場にめずらしいチョウがとまっていました。そのチョウは、黒く光ったガのようなチョウでした。チョウが飛んで、ぼくがチョウを失った時、だれかに見られているような気がしました。

まわりを見わたすと十五メートル下のほうからカモシカがぼくを見ていました。最初、灰色にみえたのでオオカミに見えました。カモシカは五、六分こちらを見ていました。そのあと水を飲みはじめ、草をたべていました。そして山を登って帰って行きました。

これまで富山県の立山の帰りに電車の中からカモシカを見たことはありました。でも、山道でカモシカを見たのは初めてで、うれしかったです。上ノ原の山道は、人間がとおったかんじがしない山道で自然の中にいるかんじがしました。



茅と養蚕

米山正寛(森林文化協会)

カイコがつくる生糸は、かつて日本にとって最大の輸出品だった。国内の繭生産量は最盛期の昭和初期に年間約40万トンにのぼったが、今では3桁も少ない200トン程度にまで減ってしまった。

養蚕業の現状はそれほど厳しいが、その中で群馬県は繭の国内生産の4割程度を占めて日本一の座にある。「富岡製糸場と絹産業遺産群」を世界遺産にしようという運動も繰り広げられている。とは言え、25年ほど前に自分が県内で暮らしていた時には、まだ各地にカイコの餌となるクワの畑が散見されて「養蚕県」としての趣を感じることができたものだ。それが現在では、クワ畑を見つけることさえ難しくなってしまった。

むしろ今では、2階に飼育用の蚕室を備えて、高窓など独特の構造を持つ古民家の存在で、「このへんでもカイコを飼ってたんだなあ」と気が付くことが多い。50年余り前には県内農家の3分の2が養蚕をしていたそうだから、農山村へ出かけるとまだ当時の建物がクワ畑よりもたくさん残っている。

5月11～12日に初めて同県みなかみ町藤原での森林塾青水のプログラムに参加した折、目の前で見た民家のつくりの話から始まって、予期しない形で養蚕の思い出話を地元の人から少し聞くことができた。今ではこの地区からも養蚕は姿を消したようだが、まだ生業として営まれていた頃の様子を記憶されている人たちはご健在だ。

カイコは卵から育てて繭の収穫まで約40日ほどかかる。同じ県内でも前橋市など比較的温暖な平野部では、年4～5回もカイコを育てることができる。ところが藤原では年2回しかカイコを育てられなかった。冷涼な気候のために、クワの生育期間が限られてしまうためだ。ただ、その気候条件のために病気の発生が少ないという利点があり、生糸を取る繭の生産より、農家に配る蚕種(すなわち卵)生産のための繭を育てていた農家が多かったのが、この地域の特色だったようだ。各農家は収穫した繭を、集積場である燃料倉庫の前に持ち寄り、業者へ引き渡したという。

養蚕の技術や設備は、効率化を図るためにだんだんと全国的に似たものとなっていったのだが、それ以前には地域独自の工夫も見られた。カイコが繭を作る時期になると、農家はカイコをそれまでの飼育台から、蔭(まぶし)と呼ばれる繭を作りやすくなった場所へ移す。これを上蔭(じょうぞく)と呼ぶ。この地域ではかつて、蔭の材料として大量の折った茅を使ったそうだ。身近なところに茅場があり、手に入りやすい材料だったせいだろうか。やがて効率の良い回転蔭と呼ばれるものが考案されて全国に普及するようになり、茅を蔭に使うことはなくなっていったという。茅と養蚕がこんな形で結び付いていたことは、自分にとって、たいへん興味深い発見だった。



群馬県中之条の富沢家住宅 大型養蚕農家の典型

口麗澤中「樹木観察会」開催報告

(事務局)

◆麗澤学園の教育理念と当塾の合言葉

ー「仁草木に及ぶ」と「飲水思源」は表裏一体ー

・麗澤教育の目指す人間像「仁草木に及ぶ」

- ー大きな志を以て真理を探究し、高い品性と深い英知を備えた人物
- ー自然の恵みと先人の恩恵に感謝し、万物を慈しみ育てる心を有する人物
- ー自ら進んで義務と責任を果たし、国際社会に貢献できる人物

・「自分プロジェクト」は中学 3 年間を通じた学習プログラム(総合学習)

- ー1年生: 自分と自然の関係を学ぶ(樹木や森に学ぶ)
 - 2年生: 自分と国家の関係を学ぶ(熊野、伊勢、奈良、京都を訪ねる)
 - 3年生: 自分と世界の関係を学ぶ(英国、ニュージーランドなど海外訪問)
 - ー最後に「自分史」を書く。自分の存在や現在の豊かで平和な社会の根源を思い、「根本につながる」「感謝する」「自分の使命を見つける」ことを期待
- ##### ・森林塾青水の活動理念「飲水思源」
- ー出典「徴調曲」(北周)の詩「その実を落とす者その樹を思い、その流れを汲む者その源を思う」の一部。
 - ー文字通り、「果実を食べたら樹木を、水を飲めばその源を思うべし」の意。
 - 中国では、「井戸を掘ってくれた人の恩を忘れてはならない」の訓え。
 - ー現代流に言えば、「水道の蛇口の先に思いをはせ、生命の水を育む大自然に感謝し大切にすべし」ということ。

◆今年の「樹木観察会」のプログラム展開

中学 1 年生のみなさんと樹木観察会

～樹木観察会のインストラクターをしました～

去る5月18日(土曜日)、千葉県柏市にある麗澤(れいたく)学園のキャンパスで、中学1年生160人を対象とする樹木観察会が行われました。

同中学校・高等学校では、「自分(「ゆめ」と読ませる)プロジェクト」と称して、自分自身の関心・適性・能力、また将来に対する意欲を発見するための自分発見プログラムを実施しており、スタートの中1で、樹木、水源の森に触れるという野外活動をすすめているとのこと。去年までは日大生の皆さん(教職課程)が企画運営をし、森林塾青水はそのお手伝いをしてきたのですが、今年から単独で企画運営を任されることになりました。

これからの可能性を秘めた真っ白けの生徒たちが相手に責任は重大。森林塾青水を中心とした約10人のメンバーは何回かの下見を経てプランを練り、5月18日(土)、幸いの好天のもと本番観察会に臨みました。

46ヘクタール(日比谷公園の3倍、ほとんど新宿御苑なみ)の広大な敷地の中、300種1万5千本の樹木があるとのこと、桜は終わっていますが、ヒトツバタゴ(別名ナンジャモンジャ)の真っ白な花から、マツの地味な花まで至る所

花盛りでした。

さて、ホールに集まった生徒は全部で160人、20人ずつ8グループに分け、それぞれが1グループを担当することにした。

都会の中に育つ生徒たちに、知識を教わってもらうのではなく、それぞれの樹木の違いを自分の五感をもって発見してもらおうということで、観察ポイントごとに、①いろいろな種、②種からの芽生え、③木の種類ごとの形の違い・下から見た姿と(陸橋の)上から見た姿の違い、④木の大きくなるスピードと年輪、⑤ふかふかの腐葉土の踏み心地、⑥葉っぱに触れた時の感触、匂い、⑦樹皮の感触、種類ごとの違い、⑧木の生えている場所による違い、などを体験してもらいました。



やんちゃ盛りだろう中1諸君を20人もまとめるのは大変と各グループには先生に一人ずつついていただきましたが、これは杞憂で皆大人しく聞いてくれました。ただ、樹や葉っぱに触るのをキタナがったり、怖がったりする生徒がいたのにはちょっとガッカリでした。でも、やっているうちに童心に帰る？っていうと変ですが、子供らしさを取り戻して、終わるころには地面からドングリやカブトムシの死骸を



掘り起こしたり、ちょっとだけいい感じになってきました。このあと、7月の「奥利根水源の森フィールドワーク」ということで、上ノ原で再会することになります。庭園のように人工的に植えられた姿と、大雪の自然の中に育ってきた上ノ原の樹木の姿との違いに目を見張ることでしょう。それから、キタナイなんて思わずに、草原を転げまわる生徒たちの姿が見られることでしょう。

最後に、個人的な感想になりますが、森林塾青水の掲げる諸目的のなかでも、将来を担う世代の教育が最重要、こうした活動を担えるノウハウと人材を蓄積していき、あちらこちらから声がかかるようになれば素敵だなと思いました。(松澤、記)



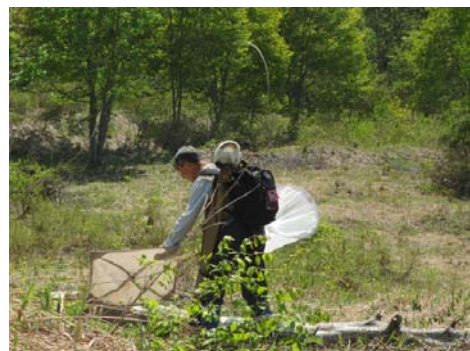
□上ノ原の植物・昆虫と芦ノ田湿地の調査

西村大志

調査年月日 2013年5月25日

●午前中(7:00~11:30)上ノ原

山崎さん→昆虫調査。草原の低木に止まっている虫や、ハンノキの花やカエデの花に集まる虫を中心に調査されていたようだった。



増井さん、西村→植物調査。植物としっかり向き合うことをテーマに調査。知っていると思っている種もひとつひとつ図鑑を引き、特徴や類似種を確かめた。

清水さん→ごみ拾いとセイウタンポポ退治に奮闘。ごみ袋いっぱい。

上ノ原植物調査の収穫

- ・柞の泉の近くの道端にフデリンドウを発見
- ・スミレ5種(タチツボスミレ、オオタチツボスミレ、ツボスミレ(林内)、アオイスミレの葉、オカスミレ(林内))
- ・ヒトリシズカがあちこちに群生
- ・その他の出現種:ニリンソウ、ミツバツチグリ、クロバナヒキオコシ、ヨモギ、キンミズヒキ、エンレイソウ、クルマバソウ、クロモジ、ウリハダカエデ、ヒツバカエデ…等多数

●昼(11:30~12:30) 山道を通して青木沢集落へ。

スキー場のほぼてっぺんから民宿「本家」など集落と、旭岳、谷川岳を見渡す。トビを眼下に見る。

●午後 芦ノ田峠のフットパスを歩く

芦ノ田の湿地は、枯れたヨシが倒れて地面を覆い、乾燥化していたようだった。4、5年前に上部斜面のカラムツ林が皆伐されたことが一つの原因と考えられた。湿地性植物は豊かに見られたとは言えないが、ところどころ湿った状態で残っていた個所には、ミズゴケが生育していた。ミズゴケは湿原の最も基本的な種で、水を蓄え、積み重なって湿原の土壌を作る。ミズゴケがあったということは、ヨシをどけて地面をひっかければ様々な湿原植物が出てくる可能性はある。

見たもの等

ラショウモンカズラ、タケニグサ(枯死)、キジムシロとミツバツチグリ

ワラビ、タラノキ、ハリギリ→山菜としていただいて帰る

スミレ(大きな株)

熊のフンと糞に集まるシデムシの仲間

ハチクマが枝を持って飛んでいた。(写真上) 巣作りかディスプレイ(メスへのアピール)か。



藤原の“ほっと”ショット・コーナー⑤

地元・中村智子さんの、見てほっとする“photo”ショット・コーナー。今回は、雪国藤原の遅い春をよろこぶ生き物たちです。とくと、表情をご覧ください。(編集子)



カモシカも、冬毛が抜けて夏毛に衣替え(4月18日)



野ネズミのアカネズミもチョロチョロ！(4月17日)



アカゲラとヒヨドリが仲良く白樺で一休み！？(4月20日)



ホンドキツネのおかあさん。子育て中でおなかが空いたらしく昼間から歩き回ってました。(5月7日)



巣穴のそばで、子ぎつねがもの珍しそうにこちらを見ていました。2匹いました。(5月24日)



1月にウソがソメイヨシノの若芽を啄んでいました。今年の桜(ソメイヨシノ)はだめでした！

□ 編集後記 ～塾長のつぶやき～

○子どもたちの祈りに心打たれる 5月11日、恒例になった「山の口開け」。参加者一同、十二神様と水神様(龍)が居並ぶ磐座に向かい、それぞれの思いを込めた。手をつないでいた小学2年生の北山桂月くん「かず君はどんなことお祈りしたの?」とたずねると、大きな声で応えて曰く「藤原の森が都会になりませんようにお願いしました」と。これ以上に真直ぐで純な祈りがあるだろうか、と強く心打たれるものがあった。天音くん(小学6年生)にはたずねる機会がなかったが、「十郎太沢の流れがいつまでも自然のままですように」といった思いを込めてくれたに違いあるまいなどと想像しながら、いつの間にか純でひたむきな心を失って久しい自分に気付き恥入った次第。



○十郎太沢の水源「天音の滝」発見! 野焼きを中止にしたお陰で、いろいろと新たな気付きや発見があつてよかった。自然散策組は、十郎太沢の源流遡行を試みたらしい。塾生一同かねて念願しつつも未だ果たしてなかった源流探訪が、はからずも実現したのだ。そして、柞の泉から遡ること300m前後の断崖から轟々と流れ落ちる滝に行きついた由。長さ10m前後、雪解けの水を集めて清冽な水しぶきをあげて落ちる滝に一同目を見張り思はず歓声をあげた。大人たちに混じって登攀敢行した天音くんに因んで、「天音(てのん)の滝」と命名したのは上原さん。首都圏の水瓶の源流の滝に相応しい、ありがたくも浪漫あふれる命名と喝采した。(6、7頁の写真ご参照)

○春植物や冬鳥、春鳥が一同に! 野焼き中止のお蔭さまの一つは、ゆっくりと集落や上ノ原の自然観察が出来たこと。しかも、小幡先生、津田先生や上野さんたち環境プランナーの皆さま方の無料ガイド付きという僥倖。5月上旬の当地区は、春植物がオンパレード状態にあること、野鳥も冬鳥と春鳥を同時に観察できる時期であることなどを教えていただいた。恥ずかしなが



ら、これまで知らずにいた生き物たちのハイシーズンに気付かせていただき、まことにハッピーな気分であった。いちいち記さないが、上野さんが観察又は鳴き声を聴いた野鳥の合計は28種。これまで当塾が観察記録していたのは17種。観察力の差はもちろんだが、観察した時期による差異が大きいものと素人ながら愚考した次第。(写真左下は十郎太沢沿いのコリンソウ)

○「飲水思源」3点セット 野焼き中止の効用の第一は、来年に備えた防火帯造りが大いに進捗したことだったかもしれない。(1頁、4頁写真参照) 今回の作業用にと新調された刈払機やレーキなどの道具類に混じって配布されたヘルメットを見て驚いた。白地に緑色で、正面に「青水」、左脇に「飲水思源」と記されているではないか!(写真下)正直、調達の計画は承知していたもののデザインまでは関心がなかった。聞けば、草野塾頭の気配りと粋な計らしい。これで、10周年記念で作ったエコバックとTシャツと合わせ「飲水思源」3点セットがそろい踏みしたことになる。まことに嬉しく、レーキを使つての可燃物除去作業も大いにはかどったことである。



ヘルメット着帽の前田さん

○上ノ原はどれほどの生き物を養っているのか? 今年から、麗澤中「樹木観察会」を当塾単独で請け負うことになった。樹木に対する基本的理解を深めるため、何冊かの本に目を通してみた。今更ながら、樹木が持つ力に驚かされることが多かった。なかでも、コリン・スタンリッジ著『樹木と文明』は522頁にも及ぶ大著だが、目から鱗のことが沢山あり吸い込まれるように読んでしまった。曰く、「セコイア、ベイマツ、ユーカリなどの中には、高層ビルと同じくらい背が高いものがあるし、カルカッタにはフットボール場をおおうほど枝を広げるバンヤンジュがある。そのような木にはたいてい、多くの生物が棲む大都市がつくられている。ありとあらゆる種類の生き物がその樹を糧として・・・」。また曰く「私も4000種以上の生物が棲むという、コスタリカの古いパンヤの木を見たことがある」、などなど。数年前訪れた環境立国・コスタリカのレイン・フォレストを思い出しながら、この上ノ原には一体どれほどの数の生き物たちが棲んでいるのだろうかと思った。専門の先生方のお調べによると、ここにはコウチュウ目やカメムシ目など小さな昆虫類が、希少種を含め数あまた生息しているらしい。キチンと調べたら、天文学的な数字が出てくるに違いあるまい。さて、皆さんどういたしましょう。(青

2013年度森林塾青水活動計画・日程

2013年度活動の特徴

合言葉は「飲水思源」

1. 都市や地元の一般市民が気軽に参加できるプログラムで上の原の茅場とミズナラ林を保全・整備します。日帰り参加も大歓迎です。
2. 古道の整備などを通じて奥利根・藤原地区の自然・文化・風景にふれあう機会を提供します。
3. 藤原地域の行事に参加するなどして地域の生活維持のお手伝いをします。
4. 児童生徒の自然学習などをお手伝いします。

開催月/項目	一般参加歓迎プログラム		地域貢献プログラム	会運営活動等
	上ノ原茅場(入会の森)保全活動 (ミズナラ林整備を含む)	自然ふれあい等活動	地域支援及び自然学習支援	その他活動 (楽習会、他団体交流等)
4月 ～ 6月	①5/11(土)～12(日) 茅場野焼き(11日) ・「山の口開け」 ・防火帯可燃物除去等野焼き準備 ・春の上ノ原散策(12日)	②6/15(土)～16(日) 初夏の古道散策 ・青木沢峠&葦の田峠古道補修 ・青木沢古道落ち葉掻き ・山菜の楽しみ方 ・自然観察技術交換会	・藤原地区堰浚 ・古民家再生作業(4・5・6月) ・5/18(土)麗澤中 自分プロジェクト「樹木観察」	・毎月第1水曜日 幹事会(5月/第2) ・4/20(土) 総会・セミナー ・4/27(土)～29(月) のらえもん「自然塾」
7月 ～ 9月	③7/27(土)～28(日) 防火帯整備 ・刈り払い ・青刈り ・侵入樹木除伐 ・草原の昆虫調査 ④9/28(土)～29(日) ミズナラ林整備 ・抜き切り ・歩道作成 ・野点等	◎オプション 9/29(日)～30(月) 中之条町田工業&お茶講	・7/6(土) 麗澤中 自分プロジェクト「水源の森フィールドワーク」 ・藤原地区畦刈り支援(7月) ・古民家再生(7・8・月)	毎月第1水曜日 幹事会 ・諏訪神社大祭 ・藤原区民祭 ・楽習会(7月) ・全国源流サミット(7月6,7日) ・茅風交流会(7月又は8月) ・8/24(土)BPA サンセットクルージング ・流域協議会(9月)
10月 ～ 12月	⑤10/26(土)～27(日) 茅刈 ・茅刈り講習・検定 ・秋の上ノ原散策 ◎オプション11/5(月)～8(金) 茅刈り平日プラン ⑥11/16(土)17(日)茅出し ・茅運搬 防火帯刈り払い ・薪・ホダ木製作 ・野点 ・「山の	◎オプション川場村(酒蔵と茅葺民宿) 10/27(日)～28(月) ◎オプション 10月中 秋の古道ハイキング(インストラクター交流会)	・地元育成会等茅刈(10月) ・古民家再生(10・11・12月)	・毎月第1水曜日幹事会 ・楽習会(11月) ・11/16(土)～17(日) のらえもん
1月 ～ 3月		⑦3月上旬 上ノ原雪原かんじき散策 ・大幽洞探検 ・キャンドルナイト ・雪堀支援 ・郷土料理体験	・古民家再生(雪掘り2月)	・毎月第1水曜日(1月第2) 幹事会 ・楽習会(2月) ・3月上旬 のらえもん ・流域協議会(3月)
参加意義	・現代版入り会いの構築 ・生物多様性保全 ・みなかみ町昆虫等保護条例への貢献 ・奥利根の暮らしの知恵を知る	・心身のリフレッシュ ・藤原の自然・文化・原風景を楽しむ	過疎地域の活性化に貢献 ・発信型エコツーリズムにアプローチ ・児童の情操教育支援 ・暮らしの知恵の体験	
モットー	楽しみながら汗をかく	自然から学ぶ	流域コモンズの発信	